

正体が分かりそうにないので、高知県のカニに詳しい細木光夫さんに標本を見てもらいました。彼は一見して、ヒメアカイソガニ属のカニだろうと示唆してくれました。幸いにもカニの分類では若手のトップクラスである千葉県立中央博物館の駒井智幸博士は以前から知りあいです。彼に尋ねたところ、トリウミアカイソモドキの可能性がきわめて高いとのこと

でした。

さっそくこのカニが初めて報告された1974年の論文を参照し、トリウミアカイソモドキであることを確信しました。本種はいちじるしく小型で、今回の標本の甲幅はわずか5.4mm、甲長4.6mmです。しかし、これでも



1ページと同一個体。卵が白いのはアルコール標本のため。

立派な親なのです。甲の側縁は丸みをおび、歯はありません。額歯もなく、甲の表面は滑らかです。ほとんどこれという特徴がないのですが、ハサミの部分に軟毛があり、甲の縁辺のすべてにわたり平坦な部分があります。

驚いたのはこの種の分布の記録です。最初の個体は宮城県の女川湾で報告されました。その後しばらく間をおいて、大阪、兵庫、和歌山、山口、長崎、鹿児島から記録され、四国では愛媛県の瀬戸内側と徳島市の吉野川だけなのです。写真の個体は2004年に町田ほかの論文で高知県初記録として報告しました。その後の調査で、浦戸湾の西灘、浦ノ内湾の湾奥部、中土佐町の上ノ加江川での生息が確認されています。

2005年1月26日発行 発行者：町田吉彦（理学博士，高知大学理学部教授，
四国自然史科学研究センターセンター長）

本書の内容の無断複製を禁止します。複製ならびに内容についての問い合わせはFAX 088-844-8310（町田研究室直通）でお願いします。